

## 水準測量で検出された室戸半島中央部の隆起

### Upheaval of the Central Part of the Muroto Peninsula, Kochi, Shikoku, Japan detected by Leveling Survey

# 大村 誠[1]; 前空 英明[2]

# Makoto Omura[1]; Hideaki Maemoku[2]

[1] 高知女子大・生活・環境理; [2] 広大・教・地理

[1] Dept. of Environmental Science, Kochi Women's Univ.; [2] Geography, Edu., Hiroshima Univ.

高知県東部、室戸半島周辺では、室戸沖の南海トラフで発生する巨大地震などの地殻活動に対応して、特徴的な地殻上下変動が沿岸路線の水準測量によって観測されている。しかし、沿岸のみの水準測量路線では、室戸半島内陸部での上下変動パターンを正確に推定できない。

そこで、半島を横断する路線での水準測量が、筆者ら(2001年12月~2002年11月)と国土交通省国土地理院(2004年1月~2月)によって実施された。水準路線は、高知県安芸郡田野町の国土地理院水準点5156と、半島を越えた同郡東洋町の水準点5125を結ぶ、ほぼ国道493線沿いの84点の水準点からなる(大村・前空, 2001, 前空・大村, 2002)。総路線長は約47km、路線での最大比高は433mであった。

2001年12月, 2002年3月, 9月, 10月, 11月に、筆者らはデジタルレベル(Leica NA3000)と同社の3mインバール標尺を用いて水準測量を行った。また、2004年1月~2月に、国土地理院が同じ路線で2等水準路線の設置と測量を行った。そのとき約50点は共通の水準点を使用したので、約2年間の上下変動が得られた(大村・前空, 2004)。

今回検出された変動には気象影響等が残っている可能性があるが、巨大地震の間の期間でも、室戸半島中央部分は、海岸部に対して年間数mmの速度で隆起していることが判明した。室戸半島は先端部の定常的な沈降と合わせて、半島内陸部の山地が高まり、現在の地形を形成し続けるような上下地殻変動も行っていることが強く示唆された。次の南海地震との関連を研究するために、今後も水準測量・GPS観測等の継続が必要である。

なお、京都大学理学部地球物理学教室の藤森邦夫博士のご協力をいただいた。また、筆者らによる水準測量は、広島大学後援会研究助成(平成13年度)および高知女子大学生活科学部長留保金充当事業(平成14年度・平成15年度)として行われた。また、国土地理院からは技術的助言および「平成15年度 重点地域高精度三次元測量 室戸地区」の水準測量データをご提供いただいた。ここに記して、深くお礼申し上げます。